



外国人と「日本語で」話すとき

荒川洋平

ことばの研究、つまり言語学には「ことば一般」を考えるものと、個別の言語について考えるものがあります。わたしは前者については認知言語学、後者については、もちろん日本語を「国際言語管理」という分野から研究しています。この稿では、後者についてお話ししようと思います。

現在、世界では五〇〇万人以上の人が、外国語として日本語を勉強しています。新入生の皆さんが主専攻のことばを一から始めるように、アジアでもアフリカでもヨーロッパでも、下は小学生から上は六〇歳以上の人まで「あいいうえお」から日本語を始めているのです。

その結果、わたしたち日本人と外国人が「日本語で」コミュニケーションを取る機会も増えてきました。通常、国際コミュニケーションということばから連想するのは、わたしたちが英語なり中国語なりを使い、外国人は自分たち

の母語や英語を使うというパターンですね。それが、少しずつ変わってきています。

こちらは母語である日本語を使い、あちらが外国語として日本語を使うのだから、これはわたしたちにとっては楽だし、簡単なように見えます。しかし、実は日本人と日本語で会話をする外国人からは、たくさんの不満が聞かえてきます。

●ちよつと挨拶を交わしたただけなのに、「日本語が上手ですね！」と激賞された。

●助詞の使い方を間違えたただけなのに、長々と訂正された。

●きちんと日本語で話しているのに、なぜか「ノー、ノー」と逃げられた。

これに似た話は、皆さんご自身も経験したり、見聞きしたりしたことがあるかもしれません。なぜ、このような問題が起きるのでしょうか。

一つには、そういう形のコミュニケーション——「対外日本語コミュニケーション」と称します——に、わたしたち日本人がまだ習熟していないことが挙げられます。たとえば、世界中でコミュニケーションのツールとして最も用いられているのは英語ですが、英語の母語話者である英米人たちは、わたしたちのような非母語話者と話すときに、分かりやすい単語を選んだり、ゆっくり話したりという、何らかの「調節」をおこなっています。わたしたちはまだ調節をおこなえるほど、対外日本語コミュニケーションには慣れていません。

もう一つ、わたしたちは外国の文化やことばを取り入れたりすることは無造作に行いますが、自分たちの文化やことばが外へ広がり、摂取されることには意外に厳しい、という仮説があります。身近な例で言えば、アポカドを載せたイギリスの寿司の写真を見て、これは寿司じゃない、と憤ったその口に、イタリアのナポリ市には絶対にならない「スパゲティ・ナポリタン」を放り込むようなものです。でもこれって、相手のものは何でも欲しがるけど、自分のもの

には何かと理由をつけて渡さない子供と同じ態度ではないでしょうか？

二一世紀の中盤に向け、日本が外国の国々とうまくやっていくためには、日本語を学ぶ外国人には、より良いコミュニケーションのために日本語を分かりやすく話す努力をしよう、互いに恩恵を得るために、文化の摂取に寛容であろう、これを個人・組織のレベルで行おうとする取り組みが「国際言語管理」という分野です。

世界中に広がりを見せる日本語と日本文化を、おおらかに支援すること。それは単に英会話のフレーズを覚えるよりも、はるかに国際的な態度です。本学の学生である皆さんたちには、特にその態度を持ち続けていただきたいと思っています。

〈参考文献〉

荒川洋平『とりあえず日本語で』スリーエーネットワーク、二〇一〇年
本名信行ほか『国際言語管理の意義と展望』アルクオンデマンド、二〇一一年

あらかわ・ようへい 一九六一年生まれ。東京外国語大学留学生日本語教育センター准教授。認知言語学。著書に『日本語教師のための応用認知言語学』（共著、凡人社）、『もしも…あなたが外国人に「日本語を教える」としたら』（スリーエーネットワーク）、『日本語という外国語』（講談社現代新書）など。